－所蔵作品紹介－

山口　正城　YAMAGUCHI Masaki

赤いカノン

あかいかのん

作品データはこちら

1939年に京都市立第二工業学校へ転任した山口正城は、戦争末期から戦後まもなくの一時、教育の現場を離れるが、1948年に東京へ移り、翌年から亡くなるまで千葉大学工学部工業意匠学科で再びデザイン教育に携わった。また紙を素材にした工作にとりくみ、1952年に単行本『新しい紙の造形』を出版している（没後の1963年に英訳も出版）。一方、自由美術展のほか新聞社企画の「現代日本美術展」「日本国際美術展」などにも出品を重ね、亡くなる年には自由美術展を離れた。

制作では、戦後数年間も烏口による直線のみの構成を続けたが、1952年の夏、本人によれば「思いがけなく」、新しい技法に手を染めることになった。ケント紙に水性絵具をのせ、へらのように画面にこすり付けて抽象的な形を生み出す技法で、自身「ヘラ描き」と呼んでいる。以降山口は特に水墨調のにじみを加えるほかは、烏口とヘラ描き両者の併用に技法を限定した。

1954年からは約70㎝角の正方形を画面にした一連の作品が生み出されており、〈赤いカノン〉はその最終段階に位置する。かつての直線構成と比べると、硬質さは保持されているとはいえ、明快さは失われている。代わってあらわになったのは、直線の秩序が隠蔽していた混沌をはらむ精神の領域ではないだろうか。

それはむろん作者の意図するところであった。烏口が自らの意志を反映させるメカニスムなのに対し、ヘラ描きはオートマティスムにあたる、と彼は理解していた。オートマティスム導入の開祖であるシュルレアリスムによれば、それがひき出してくるのは理性のコントロールを離れた領域、つまり無意識の領域だ。山口がその領域に何を見つけたのかは定かでないが、「鬼」や自然現象に関係するタイトルにその答えが示されていると考えられる。

こうしたふたつの技法による制作を、山口自身はメカニスムとオートマティスムの結合と認識した。それは抽象とシュルレアリスムの総合という、戦後まもなくの前衛美術の課題のなかに自らを位置付けることでもあった。だが素材と手法、彼が好んだことばに従えばメチエを制限し、その制限から逆に創造を発火させる信念と実践は、たとえモダニズムの制作理念から導かれてきたものであっても、より普遍的で創造の根本に関わることを示唆し続けている。

*引用は山口正城「新しい絵画の技法」（『美術手帖』127号、1957年６月増刊）より。

「北海道立旭川美術館コレクション選集1982-1997」（1998年３月発行）より